

十かゝり

8/2-9 (濟)

俳諧資料カード

年代	文政元
編者 (筆者)	可憐坊可也
書名	十かゝり
備考	周防藩 シノ 10/10 (新字)

(下垣内蔵)

杏林園のまろくゆく長沙氏の
蹤と慕ひく垣の一方に人を
見ると息あふぬと滑稽れ雅趣
歎く雪のゆるり下の子其まとうも
独り下られた地の風なとる守りまふ
桐葉泉石れ静寂とまひ一碗の
茶は茶湯とま味く凡雅の物と
東よりまうまろく文化も九の委



栗市阿賀北五丁目三番八号
下垣内和人
電話〇八三二七一九六五〇番

夕月れきふ六申れ誕辰よけり
 夕月れ親賓と招ふ宴會と
 夕月れ此日の水くさふ事遠く
 遠く此雄佐の去りへくはしい質
 帳と述へくいさくは祿鶴の詞に
 かの事ちりり

是く此歌くくるよ松の年
 雨朴園 栞二

烏帽子着く勤もさゆと成りかたに 十凡
 空も自在れ自在くきり 專理
 六部の外も折く市便り 秘紅
 降り花をなすくはのてりひり 梅鏡
 押くけにふ意と打き一月見えあり 踏曉
 けくらすき聲くきりあれ鳴き 伝星

川をぬき 晴の晴なる 白の面 徐州

溝と隔て 美儂と 色にを 梅仁

媒と可なり せしむる 素白

衣と脱き ぬんぬん 素柳

塵ふ ぼれり ときり 菊

おひき ぬき ぬき 柳華

ふきぬき ぬき ぬき 柳華

乳母 ぬき ぬき 徐州

ちり ぬき ぬき ぬき 徐州

ちり ぬき ぬき ぬき 下秋

のふか ぬき ぬき ぬき 叙じ

松皮 ぬき ぬき ぬき 琴鼓

八專の ぬき ぬき ぬき 文史

ま ぬき ぬき ぬき 二葉

ぬき ぬき ぬき ぬき 松江

ぬき ぬき ぬき ぬき 李狂

心——のふ師をときも登り馬 氣晴

海^のくまははむ雪の白妙 千里

おき——わくきよなる—— 夕雨

琵琶のくまへき——指の 里計

文らまう——小菊きり 亥中月 如堵

海^のおとろき——と 踏松

二 痛ハくちあきれよ 雲うき 里橋

一 心きりよ 思名の負々 可雪

唯 是は法の幕 唱衆もきり—— 閑哉

師くまきにもきぬ 新 詠 可也

義なつ 筆斗を投ぐ 卦と記—— 素雪

こうく 栞 果——ひ—— 朋 季 同

あきあき 空名の坂 小月の影 其白

二 中 には 鳴く 幼き—— 雲 鳥 耕

傳 文とも 秘すを 睫の 傳文子 習之

次を 隔く 可れ 紙 文 耕

同心の雫のき報の遠き
きい繩なれもつる神
まさしくなれすもい
そまに前くなれ葉の経
文橋
荻川
里友

右原氏行

右原氏行の歌集の巻の目録

順坊の歌集とまり終んと

曲々れいとそひよ約束とて

心算入歌集

和歌

和歌

三千三百れ流くまわむ

のときと宴といふ井夜りれ

窓をふき清の清もまよして

あまふくしるのつらむるふ

あまふくしるのつらむるふ

一節

一節

一節

一節

暖心居も新居にけにまゑきて 井植坊

狭心きれも城下よりきり 如也

台島してこ子も舞ふははらと 雲化

袴の火に一も傳ふてやと 一の真

夕月クの雲の空しくちりくと 雲天

まゝ町帯とて一もきけと 花溪

うづ枯らやあうと云ふはあはり 荷柳

まゝと起清と云ふてつと ぬき

唐紙うづりも小晴の真なる 素海

去利央のこきて蒸く 柳月

紫浩も居やありと雲とあり 如兵

先とて 鶴の園を遙お 友二

うづりも東にや明とありと 文輝

帯く帯れすと、隅すと 奇石

進物も断らとあくと久良花 松鳥

町きけと下と同きと 友 鳥書

断たのー十かゝる松の宿れあり

素柳

む咲やいく十より此松の宿

素山

たれ自しや味とてー松の蘇

笠栂

世にまわれさゆくらの花の名も

如檜

ふりーしん子幸れむと松の宿

黎卯

松弁れみよりに致へ老乃ま

梅幸

せれ借ん移ふんをつく

里友

まれ候は級や庭もー此嶮

如菊

是く我のとゆきさの蘇へとも

柳糸

歳と勢も移ふや松のま縁

瑞河

た城あふ移ふ柳のまかも

丁秋

はそれと舞や中崔も及移し

瑞松

是く我をたゆとれ誦をとも

里斗

自移ふ寓もあふー日永時

己橋

翁子世も咲まへあーまの宿

棠雨

春まらぬ松の丁よりやろ縁

小鶴

すかゞあゝ——十うそりやも松の宿 念白
乃のむそ老れ後いも世の時も 其白
逢ふ日や老とめ門の松乃む 友之

あゝ——文化も丸のまぢ月此ら屋と
栞ひ本卦ウえりの壽遂と用かゝへ
おまきう此原房多りきり——されちるを
あれると下れお海の時う——こも
よれう——とまのい——まのいよの
かつしり来永く人のまをい——
希ふもちう

越くやむ笑く松よこれ業も 蘆川 下世堂

武門連

枝葉はふあたのち——松のむ ハナコ 十凡

む笑やいく十かえりもまの宿 栞也

それ業へのなをく——みとり松 翠々破

千代八子代かゝる善れ宿れ栞 二葉

勢もふ後かゝる宿や日永時 栞江

乃かろる松も花も——松乃む 氣晴
 善うきくも松も本卦ふぬるつじ 栞卜
 是く我むじ松りん松の鳴 其軍
 松くもくこ子も勢勢れ老のま 警岩
 りふりや又もりく松たけ 子星
 老せぬやちと勢ふとぬく松のむ 文史
 千世のきて老松の花咲合ん 一羽
 子代もも松くもくや松の花 孝和

東陽連

約束のふれ——たのき——菊れも葉 初夜
 是く我む自在も花もさる 可松
 せれ返いのまにふれや糸柳 夢白
 的鬼とくもぬ家やう松の 如仁
 松ふくや実のかけりく 友和
 翁子代も松の響きん響きよ 文和
 松うえふ響りもふ——菱のむ 五雲

あつらふくしむをえりや松のむ 三友
笑ふふ宿り我柳の音も涼し 文之
こころを来く富も日永時 一篇

不易連

砂かきゆくもももやるのま 智之
あけしんもあもあけり 文辨
哉子世れ業へやととく松のむ 芦舟
あつらふくしむをえりや松のむ 系辭

あつらふくしむをえりや松のむ 初連
子代八千代笑きゆくや玉横 凡為
ことあふれまやゆかた松のむ 系句
是かきくも松乃業をな 卯吉
笑ふのまをたのしや宿の柳 松波
あつらふくしむをえりや松のむ 芦舟

非常連

あつらふくしむをえりや松のむ 井極坊

一 後小宮や庭に酌はく 如白
 巖跡のふと程差れ 宿の梅 可與
 正 嘆くふやかく 松のあつ那 露伝
 多れ一うん年一順ふ 雪を 臺天
 壽きて 瘠 露のたふすのとり 山溪
 いく子世もかりし ち晴やみより 松 少年 文輝
 とし〜 小梅も〜 ち草やうわ 日 友二
 ちとわ〜 ち巖とむれ 三千代も 系破

是くは 後ひききひん 千代のま 如 水
 未 永き 業へと 柳一 のまか〜 柳 柳月
 隙も ちと ちあふ ちる ち〜 後ひ 弁石
 潔心 ち〜 ちや 梅の〜 一 柳て 鳥雪
 嘆く〜 上 ちよ ち〜 ち〜 梅 ち〜 了 柳
 月 正 の ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 如 真
 後〜 心 岩や ちと ち〜 ち〜 ち〜 松 鳥

笑のえももての心合一着衣始 一笑
 空たのーく人たるもあまのむ 和仲
 義まも作さあまや様 三階 以覚
 心まもあまの心もくもむれ名 一流
 おとあまのまをひま一 年代のま 其鶴
 長んあまの三千代の名もあま 初月
 長あまのあまのくもあまのあま 川屋
 まもあまのあまのあまのあま 烏夕

年あまのあまのあまのあま 其凡
 まあまのあまのあまのあま 其雪
 是かあまのあまのあまのあま 一の雪

あまのあまのあまのあまのあま
 其又のあまのあまのあまのあま

たのあまのあまのあまのあま 素狂

たのあまのあまのあまのあま

きりりるきり望園ありよせよ
とよりれ業人をとてし

希少あり

ふきよもふりよと宿れ夜の世 逸甫

今更むしの大馬ふ等すくま
秋とこしとく年算すくに耳順
ありぬされや先師雪洞仁在の
あり清邦の通志と目録の絶へ
さくゆいと約いとれいとえ
経と不肖とさひ医業れり知言

にけ比の風流さともよりくらもま
眾かそるるまの才一ありんたを
社中よりあるは歌祖の歌ひた
松舟の操ふ准と書歌祝章を
より自己を顧と心とく

すくもりれとみありぬーや老のま 一の俤坊

まややく世にすくふの奥 遠る連 田哉

老ふもくくぬあや 折れ糸 糸言

んもとも老をぬぬりや松の花 一の松

をまゝぬまや松乃のみより 和友

三子と勢北名も奥の柳のむ 系柳

砂もあつたもこれ程いや日永時 雨柳

おれ名うゝも一八千代の玉椋 鳥耕

おとぬらん歳まゝりせておの松 季因

笑をれや是うそ並十かえりも 艾慶

子と勢強くあなたれ一や松のむ 子之

延ふちと学もかく柳一う柳 孤心

細の賀の多成長かじんまこれむ 湖月

あかえりまゝくや松のみより 金子

あーさや幸祓ふ門れも緑 綾之

あ代をゆるまかも玉椋 文載

それとの八千代も一柳のむ 折枝

あゝ一強く是そ子と勢北初編 麻林

様先うゝる松の啼むのまゝ 吐厚

子代とゆるまかや松のみより 雨夕

あつらふ松乃歌を移ひそく
柳渡

雪解て一際わくわく松れ色
李橋

雲色もわくわく老の筆一始
南畦

春衣着る老のすくや花のま
荊鳥

糸一かさん歳子世くきて移ひ初
石鳥

わくわくするまやもれもく移ひ
宝光

おれさきの末たのりき柳
蘭景

あつらふまやもれもく移ひ
杜夕

花のえとつ芳りやを仲間
柳風

咲くえくまえたのく老のむ
錦市

糸一かさんやう考てのむのま
夏月

咲き入ん歳十くえりも老のむ
鳥

身ねとつすも匂をうま
浦泉

咲き入ん考てそ歌のまも
魯鳳

改えて春と移く老乃年
年凡

わくわくするまやもれもく移ひ
二襟

さうれ初もも身に順ふり日竹甫

孤独と醫術の仁を絶一連之
凡雅の位と説くさう世に此人和
おつては佳山ある可伴主坊
あつて耳順の歌を賀一
あんきふそれ後善れ命もさる
ふりあふそれお仲のなふ老後の
極とさるそくつり祝すれ
一章を戯し終る

さうえさうも補茶のふ合で 有律化

さうえさうも補茶のふ合で 和石
相せれ各も是くおるそとり 拾雅
着衣れ喉をほくてお着る始 遠化亭
おむよすさもさうし 郷
歳せもんも本れむと改免て 柳之
子の賀やふせをまく松のむ 柳供
あつて松の齡もあつて 其一

是くも茶へお色や松の葉 藤花 為琴

かこても花の初衣や茶代く 玄市 観古

花くおひぬををせく松の花 口 可交

いんまてもきぬらひそ玉桂 口 花破

花いいもあふそ初衣や二なれ鳴 口 故推

春ん花をぬまを千代の松 口 素舟

あふかす花いよかへんうー初細 口 亀睡

あれーう席へ林下れあふい初 唯笑亭 了童

あかえうーや茶ー老の嘆 山口天田 儿涼

紅うに花をく雪やー初細 口 里正

美あひまきし花をさぬうー松のむ 奈古 柳雨

花も茶くあふぬさぬや茶代のま 口 存心

いん代も雪うぬあや松の葉 口 松緑

細の賀や幾十かえうく初花 萩 素信

可律中房の手順の賀歌と

とよぬきく

八十二

童初葉あふいよ初んらー初 升園舎

文通

了律の房去る一此を至らる
しはたけり一を遠の根り一かな
遠に武陵の旅籠に慈像より
まれ社中と云一をを飾りしと
まき伝あり

在東武

遊系

鶴も身てふと婦若婦人千代の妻

老も妹とりよはし松蔭

西律坊

雛酒のそくねりよはし物破く

白雲坊

燈臺の火のきくくくと

松蔭

桑金一はきるまは細草花

三枝

おしり男の春の徳さよ

有徳

十分よあしを月れ草

一志

秋穂よかきりふ便りれ

鳳兮

有縁や神の恵とれうけす

一斗

飛りきふの是き摺小斗

雲若

同し須万ふり度され西東

文志

蝶のほひもあはさるく

蝶花

元氣絶されねるきり意のそよよ 圃園

世もかゝりされむいふ 周戦

世も今平順子の首ふ白し 其蓮

多岐未永おむと多岐 蘇夕

右百韻 首尾吟

ふさのちきくマハ室裏 一志

さびりあまきと松のむ 三枝

老の名は行くきつや梅の宗 松橋

志武五友

あやかしんおれ妻のむ乃ま 存徳

あゝんちとさきくけまも 五芳

今年かしんたれい 周戦

産くまん産むれい 一斗

幾千世もさかしくれみみり 鳳今

おと婦さを寝ひそくや百子多 文志

今年よりおとぬ小長 玉模 蘇夕

あかえるまやみりお松の文 蝶友坊

棠へりこと物花を——徳の花 圃園
身小きすく移り兼れま 其蓮

諸国の部

すもたの——とらとて移り老の妻 石舟蓋田 梅芳

花をまぬ老の望——や見そえら 日 画中

十かえり花苑のなりや老と松 日 自然坊

きも百千移ひすきん身果結 肥古作 洞虎

歳と——もあうく——歳きよ六のむ 尹け

子世も極くたの——老菊と老の友 日 平花坊

伊達有氣に海くると——老の妻 肥後山麻 見栴仏

老ぬりもつ——六を移り妻 日 周而

世を今そ移るき 日 味も 一 路

咲むし花う海か——ん老伸—— 日 蘆雪

身より花く移るくあ——ん松の心 日 関月

たの——や歳十くそりれむの歡 日 花悠

あかえりすく——や松のむさかり 去依るか 壺泉

車たきよしとく帰きれきて福多州 信在 東堤

咲く花ふかきへくや又ちくのま 口 宝童

つる郎順ふとこり花うき 口 妻大

三千と勢の概の二葉や六十地ま 口 文史

月むふ茶をたのきき松の匂 口 五雨

還厩と到りき神もや福多るよ 口 青子

十八の公やおもしろ初良とり 口 家柳

明六つれいよく〜 口 むのま 口 妻美

遠くゆく〜六日とむれま〜 口 梅国

歳年と算へく〜 口 若緑 口 其鳥

祝りや〜葉や六よ〜 口 教とす 口 豊郷

六十と〜二葉のままたの〜 口 蛭我堂

り末を千代も勢き松の〜 口 東武 口 祝峯

断祝ふ日も去案とや鶴の〜 口 曾柳

目も清〜 口 海山ハ虎也 口 今石

守へね〜 口 人嚙るきれ 口 あり 口 あり

よせの各れそめ極一や松のむ 料交
すくくももんそくちふ百きよ
百 三十一日

そいれなをそめゆく凡雅乃
信信と運りそ防のほらる可律
由房はもと身順一の断まれを
それ雅達の用くくく一のす
をく案一て一章と
代りふ

祝一書くのこ

六くく六くくれ教く千代のま 雪香園

目くくく枝のままとゆ一

可律由房とまを付る

おれ御の花と松も 慶ふ者 凡を信

坊のほらる可律由房とゆ一耳次の
事かるとまかしくよ方らほらめ
刀直の業と扇ゆりしゆ一すめれと
もくくふそれ腹達をまゆ一祝一

老松のまゆたれと一十めそりも 白雲坊

名録

得れあゝ井筒と見えく柳の南 萩 多良方

藤のやよもあを夢へく見え 日 良雨

木かき一やふふあをさきして 日 萩

萩入や蝶すき。まきく取 日 古杯

木下行へ舞もかあをさき 日 推志

魚りぬきとさきとあ 日 指ふ

掃きて庭のまきや 庭北門 日 赤雲舎

窓よ吹く眠へしき 山口 中妻北風 白折

海へかきく 長府 萩川 菊舎

長き人く細さく 海の小き 山岩 平凡

船よきく 有律 有律伝

風や戸れ遠 之井は和歌 海のき 一斗

一斗 肥前 体徑

柳 日 藤原 日 藤原

吹止んく 日 柳の南 蘭石

響 信花 大樞川 みるる

秋風也一ね移のゆり吹也 去依了知 了中

嗚る心よ下く也初時雨 三所西尾 風今

草よまなく纏よき石やまこれ 有歌 花芳

我よれよたし風也猫の意 有歌 柳止

依端く連を振くやわら川 有歌 調和

かき啼く瓦がまたり 有歌 了健

橋く一節の響古やまの月 有歌 夢里

第まなくたし 有歌 文志

又せはよ 有歌 月

後うかの園子も 有歌 夢

そあははぬ日れ 有歌 周磯

争枯やむ念の店も 有歌 雄古

き里や藤のま 有歌 李芳

あや明く旅籠白 有歌 言言

まれま 有歌 月

予よむ 有歌 子

次ノ上森くはるきさみ九月を 蝶巻坊

初音や伝し善れりぬあり 雪行

小島路のちのりて風車 圃園

鳥のや音よすくまの候 舟夕

松と山人と集る暮う都 聴巴

名月や暮わうくは帰ふあり 傍吹

夕涼や店少人よはあふ人 双起尼

すく世話のむと山も平より郭公 白雲坊

追加

下松連

そをいふいふせりきて松の花 有隣

千世ハ千世さかへん松のむれ宿 和友

歳々世も果へん松老らみたり 黒名

田心書中
ひら

美波
御
子

皇
御
書
林

幸
町
二
条
下

猶
屋
治
玄
清
梓

